

家庭の持つ機能の一つに、「共育」があります。それぞれ個性の違う親子が、お互いの良さを認め学びあって、親として子として、共に育ち合うことです。ところが、親子の気安さから、ぶつかり合いやすれ違いも起こってきます。そうすると、相手を理解しようとする解決策を模索しても平行線のまま、という状態もあるものです。

都内で建築業を営むY社長には、娘が一人、息子が二人います。息子二人は大学卒業後、自社へ就職させました。ゆくゆくは、長男に会社を任せ、次男には独立の道をと、その日がくることを夢に描きながら、社長業に精を出していました。

長男が入社して、十年余りが経過した頃、Y社長は、そろそろ長男に、後継者の自覚を深めてもらいたいと思うようになりました。都内で、後継者ゼミが開催されるというので、半ば業務命令で参加の手続きをとったのです。そのゼミは、一週間、会場のホテルに缶詰状態で開催されるものでした。ところが長男は、開講式に出席したものの、ゼミの関係者に連絡もせず姿を消してしまつたのです。関係者からY社長の元へ連絡が入りましたが、Y社長にも訳が分かりません。長男の携帯電話は不通、家に連絡をしても帰宅していないとのこと。その日の夜更けになって、長男から家に連絡が入りました。受けた母親に「母さん心配かけてごめん、今、大阪にいる、探さないで」と一方的に告げて電話は切れ、その後繋がらなくなつたのです。

Y社長は、長男の心中を図るところかあんなヤツのことはほっとけと、心配より責める気持ちが高まつていったのでした。



え・牧えみこ

子供と学びあう すなお 純情な心

その後、Y社長は倫理指導を受けました。すると、「頑なに、長男に会社を後継させようとせず、ここは、次男に会社を譲り、長男にはY家の家を継いでもらうことです」と教えられたのです。Y社長は、自分の考えを、一方的に長男に押しつけてきたこと。また心の中では、正直なところ、次男が経営者タイプだがなあ、との、迷いがあつたことを、深く反省したのでした。

それから三年の月日がたつたある日、次男から「兄さんより先だけ結婚させてもらいたい」との相談がありました。Y社長は、結婚を承諾し、さらに会社を継いでほしい旨を話しました。次男は受けてくれ、結婚披露宴で社長後継も一緒に披露することとなつたのです。兄弟同士は、ずつと連絡を取りあつていたらしく、早速、次男は兄へ結婚式への参加を懇願。会社を継ぐことも知らせました。長男は「心のつかえがとれたようだ。おめでとう。お前が継いでくれるのか」と喜んでくれたのです。

式場で家族と再会した長男は、両親に今までのことを詫び、親子三人で話し合いました。Y社長が、長男に「家を継いでほしい」と切り出したところ、快く承知してくれたのです。長男は、コンピューター関係の仕事をしていました。時期をみて、東京へ戻ってくることを約束し、現在ではそれが実現しています。

親は、子供によって純情な心になり、そして子供は、親の生き方考え方を、しっかりと受け継いでいくものです。それゆえ親は、その実現を、辛抱強く待つ忍耐力も必要です。また、自分をコントロールする力を養うことも、大切なことです。